2024 年 5 月 31 日
音楽科
吉田　あかね

ティーチング・ポートフォリオ

1.　教育の責任

2023 年度の担当科目一覧表

科目区分 (教養／専門／教職)	科目名	種別 (必修／選択)	開講時期	受講者数
教養	社会人入門 1,2	必修	1 年 前・後期	8 名
専門	専修実技 1,2,3,4	必修	1,2 年 前・後期	6 名
専門	専修実技 A,B	必修	専攻科 前・後期	1 名
専門	ソルフェージュ 1,2	選択	1 年 前・後期	7 名
専門	伴奏法	選択	1 年後期	8 名
専門	ステージ実習 1	選択	1 年後期	21 名
専門	演奏会研究	必修	専攻科	1 名
教職	教育実習　事前事後指導	教職必修	2 年 前・後期	3 名

2.　教育の理念

楽曲に対しての知識や理解を深め、自らが感じ、考えたことを表現できるようになること。又、その手段として演奏技術を高め、さらに観客の前での効果的なパフォーマンスへつなげていくことを目標としている。

教職科目においては、計画性・適応力・実践力が求められるため、あらゆる場面を想定して、学生自らが考え授業を展開できる力を身につけることを目標としている。

3.　教育の方法

専修実技の個人レッスン、また室内楽のレッスンにおいては、まずは本人の感じ方や意思を尊重するように努めている。それを発言しやすい環境を作るのはもちろんのこと、その上で違った解釈があれば提案し、それらを実践するために必要な技術も指導している。実技に関連して、ソルフェージュの授業では、自らの音を聴く力を養うため、旋律や和声の書き取り、正しくリズムを把握すること等を指導している。又、しばしばフォルマシオン・ミュジカルの指導法を取り入れ、楽曲をあらゆる観点から分析し、総合的な知識を身に付けられるよう取り組んでいる。

伴奏法や教職科目においては、学生一人一人の発表や模擬授業に対し、他の学生や教員からコメントを発表する形をとっており、それらを取り入れながら、回を重ねるごとに自ら改善していけるよう指導している。教育実習に向けては、よりよい授業を展開するための方法をお互いディスカッションする時間も設けている。又、伴奏法の授業では、見つかった課題をすぐに改善するための練習時間を設けており、学生が自らの力で効率の良い練習の方法を発見する機会となって

いると考える。更に、短いサイクルで学習を見直すことにより、学習した内容がより定着するよう、一つの単元が終わるごとに振り返りとまとめテストを実施している。

4. 教育の成果

2023 年度は、始まってまもなく新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行したため、特に制限を設けることなく全て対面での指導を行った。コロナ禍では実施できなかった、ソルフェージュの視唱や即興などの課題を取り入れることができたため、より幅広い指導が行えた。

実技においては、それぞれの学生の習熟度に合わせ、基礎的な知識や技術の強化に力を注いだ。意欲に欠ける学生に関しては、何が原因なのか話し合う時間を設け、状況に応じた助言ができたと思う。

その結果、学生個人個人が自ら考え、効率的な練習・研究に取り組むようになったと考える。又、自分の意見を述べるのが苦手な学生に関しても、毎回のレッスンでディスカッションを重ねることにより、少しずつ自らの意見を言えるようになったことは大きな成果だと思われる。2023 年度も人前での演奏機会はコロナ禍前と同等には戻らなかったが、カフェコンサートやマラソンコンサート・定期演奏会、卒業演奏会などの数少ない機会に照準を合わせ、熱心に取り組むことができていたように思う。

又、伴奏法においては、授業時間内に、アドバイスを基にした練習をする時間を設けることにより、課題をその場で改善するという効率的な学びになったと考える。振り返りの感想や授業評価アンケートの結果によりそのことがうかがえる。

5. 今後の目標

ほぼコロナ禍前の環境に戻った 2024 年度においては、より積極的に学生同士・教員に対して、様々な意見や感想を交わせる環境を作りたい。又、今後増えていくであろう、人前での演奏機会に向け、学生が自信を持って意欲的に取り組めるよう、実技指導にあたりたいと考えている。

根拠資料

- シラバス
- 授業資料（配布プリント、ソルフェージュ課題）
- 模擬授業評価票（教育実習 事前事後指導）
- 小テストの写し（伴奏法）
- 授業評価アンケート結果
- 授業改善計画書
- 定期演奏会・卒業演奏会プログラム